
飛行少女

GGG

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛行少女

【Nコード】

N5501E

【作者名】

G G G

【あらすじ】

夢を見るとき、私は特別最初にすることがある。それが空を飛ぶことである。私は夢を夢と自覚する力に優れている。そんなある時、不思議な夢を見た。夢は夢なのだが……その実態は、ある不思議な空間への扉であったり。そこには私の知っているどの人間よりもおどろおどろしい声を持った、代弁人と名乗る人間が住んでいた。

飛行少女1

飛行少女

「ねえ、これ、夢の中なんだよ」

私は言った。

「え？ 夢？」

相手は十七歳の可愛い私の親友。

名前が出てこないけど、

親友だつてことは、覚えてる。なんて言つたつてここは夢の中。夢の中から、私は自覚出来る。ここは私だけの世界だと。だから、彼女の世界ではない。つまりだ。私にとってこれは、他愛のない遊びのつもりでしかなかった。

現にその親友は、私が一声を発してからずっと無反応だ。それは私が彼女に発言権を与えていないから。

ゆつくりと周りを見渡すと、そこは薄暗い空の下。沢山の芝生に囲まれた箱庭。水平線の変わりに、壁が見える。なんたつてここは箱庭だつたから。

夢を夢と自覚出来るとき、私はすることがある。

それは、

浮遊。空を飛ぶと言うことだ。唯一私の夢に存在する人、親友を無視して、私は飛ぶことにした。

ゆつくりと体が浮上する。それは、快感だった。風が耳元をきる音がする。匂いも、草達が祝福するかの如く舞い上がる。ゆつくり、ゆつくり、速度をつけて、そして、浮遊は、飛行に変わった。

目が覚めた。

「もうっ、最悪！」

意味もなく罵った。だって、そうじゃないか。折角良いところだったのに、こんなに呆気なく終わるなんて、反則だ。頬を膨らませる。その後意味なく空気を吐き出した。ふうーって。ついでに枕を引っ掴んで壁に投げた。そしたらぼんつとバウンドして自分に当たる。

「最悪……」

本日二度目の最悪が出た。現代人の口癖。何が底辺で、何が最悪なのかなんて私にはわからないが、言ってみてすつきりすることは確かなのだから性質が悪い。おそらくは、未だ類を見ない最悪という最上級の言葉を小さな出来事にあえて使うことによって、私達はストレスを避けているのだ。小さなことに対し、大きな言葉。圧力で、圧倒的に、すつきりする。ああ、最悪だ。

夢とは私が思うに、宿願機なのだと思う。つまり、前々から思っていた強い願いが、具現化する、そんな素敵なものだと私は思っていた。だって、私の夢は、夢の中で遊ぶことだもの。夢は裏切らない。夢は実現してくれる。夢の中なら、私は最高に楽しめる。素敵じゃないか。……でも私は、いつそこまで夢に焦がれるようになったのだらう。

「麻美ー！ 御飯よー」

「……」

母親の声が聞こえる。

私の家庭は母子家庭である。唯一の肉親である彼女は、私にとつてあまり好ましくない人物であった。その理由は追々話すとして、とりあえずご飯がないと活動出来ない。まずは渋々ながらも飯を頂こう。私は服を学生服に着替え、身だしなみを整える。

「いただきます……」

食卓に母親の声だけが響く。私は一言も喋らない。……知ってい

るのだ。母が私に対して気を使っていることは。もつとも、それを回想するのは飯が不味くなるのでご免こうむりたい。やはり、追々話すことになるだろうから、この場で言う必要もない訳だ。

私の家は、普通の一軒家だ。坪で言うと約八十坪程度。さして裕福でもなければ、それほど貧乏と言う訳でもない、一般的な家庭だと思う。父親がいないことを除けば。一階リビング、ここが朝食を取るための、言わば家族の部屋。床に敷いてある座布団に座つてみると、丁度良い具合にお腹辺りがテーブルの高さになるのだ。そんな素敵なテーブルの上に乗っかている今日のメニューは、目玉焼きとトースト、その他スープが一点ずつ。……まあ、毎朝同じ食事なのだから、新鮮味はない。だけど、一応曲りなりとも作ってくれたものを無駄にする精神は、私にはなかった。

無言で食べる。但しガツガツと。ふと顔を上げるとそんな食べっぷりが気に入ったのか、母親が私の方を見て微笑んでいた。

……気色悪い。

自分でも、嫌悪してはいけなと思っていますが、これはもう持病なのだ。そういう母の素振りを見て、私は食べるスピードを落とす、嫌そうに食べることにしたのだ。しかめっ面だね。いや、これは別に反抗期って訳じゃない。断じて違うのだ。

通学は、自転車を使っている。最寄の駅を使えば確かに速いのだが、一駅だけしか使わないので、割に合わない。なので激しい雨の日とか以外は基本的に自転車通学なのだ。通学のコツがあった。それは白い線の上を走ることだ。理由はまあ、色々あるけれど、コンクリートの継ぎ目は凸凹しているじゃないか。それが白線の上だけ比較的マイルドになっていると私は信じているからだ。なので、私は白線の上を走る。

そうやって遊んでいるうちにいつの間にか私と同じ様な学生がち

らほら見える通りに出た。

あたりには少々植えられた木々。

それが学校の正門付近に生えている。夏場は正門あたりに大きな影ができ、それがまた涼しいのだが、それは夏のみ限定。それ以外は特に思い入れの無い木だった。また、そんな独特の正門を持つのが、この学校、楠木高等学校だ。

「おはようございまーす」

先生が門に立っていたから挨拶をする。数舜遅れて先生も、おはよう、と挨拶を返してくれた。まあ、これも当分の間はすることはないだろう。

何故なら、明日から学校は秋休みに入るからだ。学校に入って、自らのクラス、二の三へ向かう。

「おはよう、園田さん」

席に座って早々、私の苗字が呼ばれた。と、いうことは気がついてくれた人もあると思うが、私のフルネームは、そのだ園田 あさみ麻美となる。さて、話かけてくれた女の子は私の親友、名前はくめがわ糸川 なおみ直美という。ショートカットが可愛い女の子だ。

「おはよう、糸川」

そこで私は思い出した。夢であった女の子、私の親友は糸川であったことに。……まあ夢というなの混沌では全ての常識は剥奪される。なら覚えてなくても仕方ない。

「ねえ糸川」

「なあに？ 園田さん」

「夢の中じゃごめんね。私だけ飛んじゃって」

そういうと、彼女は怪訝な顔をして、む、と息を詰めるような仕草をした。

「また夢の話？ 私は同じ夢を見てるわけじゃないんだから、わからないよーだ」

「ははは、そりゃそうだ。二度あやまるよ」

これが、朝の主だったやりとりだった。

やがて舞台は体育館へと移行する。

かったるいことに、挨拶

捌つてやつが節目にはかならずあるらしい。そんな儀式めいたそれを聞き流しながら欠伸の一つでもしてやると、校長の禿丸はやつとこの儀式を終業という形で幕を閉めた。

「あーかつたるかった」

私は思ったままのことを口にした。

「園田さんはめんどくさがりなんだよー」

条川はのつたりとした濃厚な口調でそういった。

いや、そ

れはない。あれはめんどくさいとかそういうのじゃなくて、誰もがじれつたいと思ってしまうだろう。

「条川は、忍耐力強いよね……」

「社会に出たらもっと大変だよ」

「はい、はい」

社会、ねえ。私にとっては社会という未来の渦より、今という濁流をどうにかすべきだと、素直にそう思った。

家に帰るのは、思いのほか早い時間になった。そらそうだ。だって午前授業で済んでしまったから。 ああ、存外やることがないということに今気がついた。

自転車を漕ぎながら、過ぎた景色をゆっくり脳みそで咀嚼し、幻想する。

いずれこの風景も夢に取り込もう。そしたら、もっと楽しくなる。まさに私は夢見がちな少女だったという訳だ。

「ただいまー」

一応、挨拶をする。 それは前母親に何の断りもなく家に入ったとき、怪しい人と間違われて、危うくバットで殺されるところだったからだ。一時期母にストーカーが付いて回ることがあった。

その時の話だ。

「…………お母さん？」

静寂の所為か、声が木霊した気がした。勿論、そんなの私だけの錯覚なのだが……。でも、どうやらお母さんはいないらしい。また、どうせ適当な男の家にでも行っているのだろう。

家を長く留守にするとき、母は男とまぐわう。それを知ったのは、学校が早く終わるのをお母さんに伝え忘れた時の事だ。その日、私は早く帰って、見てしまった。それが確か高一の時の話。結局話をするのも怖くて、それ以来、私と母の間には、溝が深まるばかりだった。それが一人ならよかった。特定の男性なら、まだ納得できた。母にもそういう人が出来たんだと、祝福してあげてよかった。しかし実際は違った。まあ、そこら辺はあまり話すべきことでもないだろう。いや、話したくもなかった。最近では自宅でその様な行為に及ぶことはなくなった。だが他所でやっていることは間違いがないだろう。

何所、行つてたの？

うん、ちょっとね

これが母親が留守だった理由を聞いた時の母親とした、会話。何か隠し事していることはすぐ解ったし、見当もついた。なので私は母を避けた。

……そんなエピソードは兎も角、私は今家で一人だった。本当に孤独だった。何もやることが見つからない。そんな私は明日から長期休暇。……ああ、暇だ。

気がついたら私はベッドの上。読書をするでもなく、何をするでもなく。友達にメールをしようかと思っただけ、億劫で止めた。大して期待もしてないくせに、そんなことするのは卑怯だと思つたからだ。

その内私は眠くなつた。ああ、この調子だと、寝付くな、と自分でも思つた。白い天井がぼやけてくる。胸元は息が苦しくな

るからはだけさせている。第三ボタンまで開けているだけだ。すー、すー、と自分から寝息が聞こえてくる。否、まだ起きている。だが、意識だけであって、体は完璧に寝ていた。そのうち意識も寝るのだろう。

ぬるい。

寝る前に、何故かそんな感想を私はもった。或いは、まどろみという中で夢と現実が中途半端に入り混じったからそう感じたのだろう。夢現は、世界を侵食した。

「上手く眠りこけたみたいね」

私は夢の中でほくそ笑んだ。そう、ここは幸せな夢の中。この中であるならば、自覚しているうちはなんでも私のものになる。お菓子、テレビ、お金、ご飯、遊園地、何が何でも。自由で気ままなパラダイス！これほど夢を巧みに操れるのも私位ではないだろうか。たまに、そう思う。

今日の舞台は、なんとも形容詞し難い不思議空間であつた。水平線まで白い床は何処までも続き、空はスカイブルー。丸い球体が宙に幾つも浮いているという様になっている。ために丸い球体にさわってみると、ぷるん、とその球体の体を震わせ指で押した方向にゆったりと流されるのであつた。

夢。人の夢は儚いらしいけれど、私の夢は力強い。なんたつて私は強かな女だからだ。母が母なら、私は私。私は夢と戯れ、まぐわう。これは私にとっての自慰行為に等しい。母が現実を男で逃避するなら、私はそれを夢で逃避する。

さて、何をしようかしら、と一つ思索する。やっぱり最初にすることは飛ぶことかしら？うん、それがやはり私らしい。この、スカイブルーを横断する。地平線を何所までも、何所までも……、うーん刺激的！！！！やっぱり私には飛行！飛行が一番だ！

ふわりと浮く体。

ああ、この瞬間、この瞬間の為に私は生きている……。そして高く飛翔する。その瞬間視界は一気におりから俯瞰へと変わる。地上が遠く離れ、別世界へと飛び立つ。そして、そしてそして、私は高速の弾となり、夢世界をびゅーんと飛ぶのだ。視野なんてあつてないようなもん。全ては体感にあり。何所まで行っても変わらない風景は、しかし高速で流れる為か、私に飽きを齎せない。

びゅんびゅんびゅん。風を切る。

この

世界は、気持ちの良い風に満ちている。それが嬉しくて、私は微笑んだ。その時だった。視界の端に、何か黒い塊が見えたのは。思わず急停止する私。そして、その黒い塊を見た。　？　こんな塊、私の妄想にはなかったものだ。と、言うか、距離が遠い所為か、正確にそれがなんなのか捉えられない。もう少し、近づいてみる。

すると、それは一つの入り口であった。いや、それも正確じゃない表現だ。そう、……もつとこう、ブラックホールみたいな……、穴だ。そう、穴が開いていた。私の夢なのに……異質な感じがした。少し躊躇いながらも、私はその穴に入った。　その穴の中は、

暗い空間が続いていた。上下左右の感覚もなく……ただただ落ちていく、という感じはした。そして、その穴を落ち切った頃、ようやく地面という概念が存在する場所に出た。でもそこも真つ暗な空間で……、何と言うか、引きこもりの秘密基地みたいな感じだ。ふと上を見上げる。光はなく、暗い。どうやら前には進めるようなので仕方ない。私は前に進んだ。その間ずつと真つ暗。やがて歩いて行く内に、道は無彩色ながらもグラデーションを帯びて、先に進むにつれ色は白に近づいていった。道を歩ききったと思った頃、一つの看板が、掛けられていることに気がついた。……どうせ夢の中だし、もう行ききつてみますか。そう意気込む私。ちなみにその看板に書かれていた文字とは“噂屋入り口”。噂屋とはなんぞ？と言った具合である。何としても、私の舞台ではないような気がしてならない。……軽いホラー感覚を味わう。おどろおどろしい、とはまた違った感覚ではあるが、……形容しがたい恐怖が、じくりと胸を刺激する。

ゆっくり、ゆっくりと入口に近づく。するとふいに声をかけられた。
「ようこそ、噂屋へ……」

それは想像もしてなかったもの。ひゃっ、と思わず驚いてしまった。だって、夢の登場人物は少なからず私の知人であることが条件だと、信じていたからだ。……そうだ。私はこの声を聞いたことはない。
と言うことは、この声の主を知らないってことになる。

「誰？」

「噂屋の代弁人でございます」

「はあ？ 代弁人？」

「そうです。噂屋とはシステムであり、同時に魂として息づく存在でございます。そんな噂屋という生き物の代弁をするのが、私めでございます」

完璧に知らない世界の住人だった。どうしてだろうか。私の裏側にこんなのが眠っていたとは到底思えない。気味が悪すぎる。
「あんたさ、これ、私の夢だったこと、解る？」
「はい。存じております。ですから、我々の領土へとお導きしました」

いままでの相手とは違った返事。こいつらは、理解しているといった。じゃあ、えっと、一体どういうことなのだろうか？それに我々の領土と言った。つまりそれは ええと、理解が追い付かない。

「じゃあ、ここは私の夢じゃないっていうの？」

「厳密には、そうでございます」

徐々にその姿が露になる。それはこっちに近づいているからだ。……その姿は異様だった。黒いフードを被っていて、それは全身を覆うマントのようにも見えた。顔はよく解らない。そこだけモザイクがかかったように、見えないのだ。

唐突に、そいつは私の目の前で止まった。近いっての。

「それでえ？ 噂屋ってなんなの？」

「噂屋は、噂上の店であります。実在はしません」

そう、代弁人は言った。でもそれは矛盾していると思った。何故なら噂屋とは、現に目の前にあるのだから。

「實在しないって、ここに存在してるじゃない」

「それこそが根本的な誤解でございます。ここは夢現という名の混沌の空間です。實在していて、それは同時にしないということでございます」

「要約してくれない？」

そういうと、しばし思考を巡らせる素振りをした後、彼、または彼女はこう言った。

「矛盾を孕んでいる……ということでございます。言わば夢と現実の不連続面であるここは、情報体として、希薄になりがちなのでございます」

……全然分かんない。それに大事なことはそんなことではなかった。「私に利益を齎すか、齎さないか、それが私にとっては大事なんじゃないの？」

そう、それは至極当然な人間の意見だ。

「……はい、御尤もで御座います」

そういうと、彼（に定着することにした）はにやりと笑ったように見えた。

「噂屋は、言わば何でも屋でございます。噂屋とは、噂上に存在しているからこそ噂屋であるのです。……但し、勿論依頼には御代を頂戴します」

「へえ……でも残念ながら、私には頼みたい依頼もないし、御駄賃もなにもないの」

「噂屋に、現金は不要でございます」

「……じゃあ、なんだっていの？」

私……、今確実に顔ひきつってる……。

彼は不敵にほほ笑んだように見えた。

そして、こう言った。

「秘密でございます。秘密を媒体に、我々は仕事をこなさせてもらいます」

秘密……？秘密とは、やはりあの秘密であろうか。

「どういうこと？」

「それは……依頼してみてものお楽しみで御座います」

中々粹なことを言う……。ふん、良いわよ望むところ。なら試しに私の依頼を聞いてもらおうじゃないの。

「じゃあ、依頼するわ！ えーっと、そうだねえ……。三万円欲しいなあ！」

「……良いでしょう。小手先の願いとしては上出来です。それでは、それ相応の秘密を頂戴いたしましょう」

……秘密……、秘密……。

「秘密つてさ、私が適当に作っちゃまずいよね。つまり嘘なんだけどさ」

彼は表情を変えずに、体をぴくりと動かしだした。

「やたらめつたなことを言うもんではございませんよ、お嬢さん」

ああ、気を悪くしたみたいだ。私は素直に謝ることにする。どうやらそれはタブーだったみたいだ。絶対対にやらないようにしよう。

「じゃあねえ、私十歳の頃に十円玉飲み込んで死にそうになったんだよね。友達にも内緒なんだけど……。これ、マジモンの秘密ね。

絶対言ったらダメよ。恥ずかしいから」

そう言つと、彼はゆっくりと猫背の体を矯正し、ゆったりとしたおどろおどろしい口調で言つた。

「承りました……」

夢が覚めた。 何だ、あの夢。

「へ、へへん」

意味無く笑ってみる。

何あの夢…、何あの夢

！おっ

かしいー！

「ひやははははは」

乙女に相応しくない笑いでそのまま転げる。あーおっかしい夢。私としたことが夢に流されてしまった。しかし思い出しても、おかしい夢だなー。三万円って、私も現金な奴だなー。それに何よ、噂屋って。言ってることよく解らなかつたし。あーもういいか。暫くして、私は急に虚しさに苛まれた。

今日は休日初日。それなりに楽しまなくっちゃ。そうして、私は外出することを決めたのだ。適当な服を選び、携帯とすっかり懐の寂しい財布（中身は千円程度）を持って、外へ出る。

俗にいう商店街。そういう場所に私は訪れた。特に理由は無いが、何かと暇なとき、人間とは騒がしい場所、または静かな場所を選ぶものだ。私の場合前者と言うだけの話。そしてそんな商店街には、様々な店があつた。文具店は二店位あつたし、服を扱う店や、総合して色々なものがあるちよつとしたデパートや店、そのどれもが物欲を誘うものであつた。そんな中にある、お菓子を安く売っている店に入つていった。

「いつ来ても色々あるなあー」

そう声を出したときだつた。不意に声をかけられる。

「園田さん！」

吃驚した。何と桑川が同じ店にいたのだ。私達は他愛のない話をしてその瞬間を楽しむ。

「休み初日からまさか友達にあうなんて思つてもみなかったよ」
私が言つた。

「うん、そうだよ。それでさー」

その後も大した話題なんてないくせに、下らない駄話でその場を盛り上げるのだ。そんな時、“それ”は唐突に訪れた。

「ところでさあ……」

桑川が言つた。

「ん？ なあに？」

「園田って昔十円玉飲み込んで死にそうになつたんだよね」

「え？」

そう、それは唐突だった。何故か 糸川は私の秘密を知っているのだ。糸川は親友だ。だけれどそれは決して喋ったことのない秘密だった。

「どうして知ってるの?!」

思わず声を荒げてしまう。

「え？ さあ、何でだろう？」

そう言う糸川は、消してふざけている訳ではなく、純粹に疑問に思っていた。……まさか、そう思い、私は財布の中を開ける。そこには 三万円が入っていた。

「嘘……」

暫く私は茫然とした。そんな時、二つの言葉が私の中で反響した。

秘密でございます。秘密を媒体に、我々は仕事をこなさせてもらいます

それは……依頼してみてのお楽しみで御座います

それはどう考えても、噂屋でのやり取りが関係しているように思えた。私の勘は人より劣る。三択を選ぶときだって、確実に外す自信がある。そんな私の勘が告げる。これは噂屋の仕業だと。しかしそれはありえない。何故なら噂屋とは私の滅茶苦茶な世界観の中に存在するものだからだ。でも、一つだけ言えることがあった。

これ、マジモンの秘密ね。絶対言ったらダメよ。恥ずかしいから

この私の言葉は、完璧に無視されたようだ。

私は苛立っていた。いや、確実に苛立っていたかと言われると、それほどでもない。何故なら、三万円を手に入れたのだ。代償付きだったけれど。製造番号も透かしもある本物だ。何故三万円を手に入れたか？それは噂屋であることに間違いないと私は思っていた。そしてそれは案外間違いではないであろう自信がある。まあ、それも寝れば解ると思う。また辿り着ける、そんな予感がしていた。そしてそんな予感は、間違っではないなかったのだ。

その日の夜の出来事。母親との気まずい食事。

……家の生計は、多分だけど母親が男に貢がれることによって、多少余裕が出来ていると予想している。前に通帳を見た時のことだ。御給料日でもないのにお金が振り込まれているのを私は見つけてしまった。だから、多分そうなのだろう。……と、いうことはだ。私はあることを画策していた。

「御馳走様」

食べ終え、私は歯磨きもお風呂も無視して、布団に入りこんだ。よっし、寝るぞ。

一、

二、

三。

ぐっすり。私は夢の世界へと旅立つのだった。

今度の世界は何かと普通だった。舞台は学校。楠木高等学校である。特徴的な木々のある校門を抜けると、やはりそこは学校だった。取りあえず、侵入してみる。そして二の三へと向かう。理由はなかったのだが、自分の教室は気になるではないか。私は廊下を“飛びながら”移動する。……でも、この空間には風は存在しなかった。

何か、妙だ。その……雰囲気だ。

「もしかして！」

急いでその違和感へと駆ける。そしてその、私の予感当たった。二の三というクラス表示の札が変わっていた。噂屋入口に！

がらがらら、とドアを開ける。

「ようこそ、噂屋へ……」

それは前来たときと同じ様な声。間違いなく、代弁人の声だった。

「噂屋さん！ 私の秘密！ 絶対秘密って言ったじゃない！」

「噂を媒体とするのです……。不可抗力でございます」

「……まあ、良いけど。何かを得るには、何かを捨てなきゃいけないものね」

等価交換。まあそれが成り立っているから世界は仮初の平等でいられるのだろうけれど。もっともこの知識はもちろん漫画からのものである。

「……して、今度は何要でしょうか」

「あつと、その前に二三聞いて良い？」

「別に構いませんが……」

相変わらずおどろおどろしさは抜けない喋り方だ。声を聞いている印象は、老人のしわがれ声だということ。今更ながらにこの人が何歳なのか、気になった。

「噂屋での買い物は、絶対である」

「はい、そうでございます……」

「やっぱりね。噂屋では自分の秘密を払うことによって願望が実現化する。その変わり自分の秘密が噂として流布されてしまう。そうね？」

「はい、そうでございます……」

やっぱり。これで噂屋の仕組みが解った。……何のことはない。自分の恥を曝せば、その変わり願いが叶うのである。でもそれを素直に受け入れることは出来ない。人間として何か大切なものを失ってしまうような気がするからだ。

「噂屋は、予想だけれど、願望に比例した秘密が必要……？」

「お客様……お見事でございます」

それは、肯定という意味だと思った。いや実際そうなのだろう。この前もそれ相応の秘密が必要って言うてたし。がつくりきた。やはり世の中安い買い物など存在しないのだ。うん、きっとそうに違いない。

「まあ、良いわ。私の願望、聞いてくれるんでしょ？」

「ええ、お客様は、お客様にございます」

……つまり、特別扱いしてくれるってことね。流石サービス業。ストレス溜まりそう。私みたいなお客さん、私だったら絶対扱いたくないもの。

「早速言うわよ、私の願い」

「ええ、どうぞ……」

その瞬間、“噂屋”が蠢いた気がした。それはやはりシステムという名の生物だと自負する代弁人の言うとおりなのだろう。差し詰めここは噂屋の胃袋と言ったところか。この、宿願機が……。私は悪態をついた。

「私の願いは、お母さんの男遊びを止めてほしい！」

切実な私の願いは、無機質な声によって叶えられる。

「承知しました。……では、御代を頂戴いたします」

……誰にも言っていない私の秘密……。ばらさないようにいつも努力してた。いつも誤魔化して過ごしてきた。その秘密を　曝す。

「私、リストカットしたことあるの……。お父さんが交通事故で死んだあの小学4年生の頃、一度だけ……」

私のお母さんにも内緒にしていた思い出。　お父さんが死んだ日。病院で死が確定した日、私は家でリストカットをした。暗い部屋で、一人ではつさりと腕を切った。……でも、死に切れなかった。結局、お父さんはそんなことしても喜ばないと思ったからだ。幼心ながらに、死にたくない言い訳を作っただけに過ぎなかったのかもしれない。

腕に包帯を巻いて、自力で止血した。それから長そでの服を着て、常にはれないように過ごしてきた。そんな私の秘密を、暴露する。

「承りました……」

そう、代弁人の声が響くと、私は元の世界へと戻っていくのであった。……きつと明日には全てが知られているんだろな。そう思うと、少し鬱な気分になったが、夢はその余韻を断ち切るのかのこく、流れてゆくのであった。

早朝、五時。私は風呂に入っていた。

昨日洗ってない分、

今日洗うことにしたのだ。そして軽い風呂を終えると今度は歯磨き。これは早朝の分と昨日の分を込めて行う。まだ乾かない髪をドライヤーで乾かす。ぼーっという音が聞こえる中、私は少し、憂鬱に浸っていた。……噂屋って、結局何のためにあるんだろ。そう考えていた。

朝、お母さんとの気まずい朝食。いつものメニュー。お母さんが、何故か忙しない様子を見せる。私はすぐに見当がついた。噂屋だ。恐らくお母さんにも、噂として私のリストカットが伝わったのだろう。

「ねえ……麻美……。貴方って、小学四年生の頃、リストカット、したって本当？」

直球に聞いてきた。私はそれにうん、本当、と答えた。

「……どうして……そんなことやったの?! あ、いえ……そうよね、丁度お父さんが、死んだものね……。でも麻美、もう二度としないって約束、して」

「当たり前よ。あんなこと二度としないわ」

思ったより説教は少なかった。そういうとお母さんは不安げに微笑み、こう言った。

「私も、麻美に対して隠してたことがあるの……。でもね、うん、すごくいけないことしてたんだけど、貴方も悩んだものね……。私も、もう逃げないことにする……」

お母さんは弱弱しくそう言った。……とても回りくどい言い方で解りにくかったけれど、それは確かな決意。私は嬉しくて涙がジワリとわいてきた。……噂屋に頼んでみて良かった。そう思った。お母さんは、もう何所にも行かない。そう思うと、安心した。

「何言ってるのかよく解らないけど、頑張って」

とりあえず、私はそう言うのだ。知らん振り。それで良いのだ。

一先ずは。決して五七五ではない。

お母さんは優しく頷いた。

その日はメールが十通もきた。その内容のどれもがリストカットの事についてだった。……流石に十円玉事件とは違ってみんな食いつきが良い。そして私は機嫌をそこねたまま、そんなの唯の噂だとみんなにメールの返信をした。その後からもしつこくメールが届いたが、無視した。……人の噂も七十五日だ。そんなに日数は無いけれど、秋休みちゅうにそんなスキャンダルは終わってしまうだろう。

しかし、その予想に反して、事態は深刻であった。

街を闊歩する。……その度に人が私を見る。もちろん知らない人だ。最初は何か解らなかつたけれど、じきに話し声が聞こえた。

「あの子、昔リストカットしたらしいのよ」

「私も知ってるー。ところで私達どこでそれ知ったんだっけ？」

「ニュースか何かじゃないかしら？」

「えー？　そういう放送はなかつたと思うけどなー」

皆が皆、自覚なしにそういう情報を頭に植えつけられているらしい。噂屋の効力は、半端じゃなかった。私は苦虫を潰したような顔をしていると思う。……事実を、過ぎた過去を穿り出して、

噂して、何が楽しいのだこの野次馬でミーハーなばあどもは。も

つともその原因である私には反撃のしようがないのだからムカついてしょうがなかった。憤慨だ。

とぼとぼ歩くだけで纏わりつく噂という名の影は、正常な心を蝕む。「自業自得とは言え……これは酷いよ……」

そう、公園のベンチに座って一人愚痴る。私の願望は飛行

したが、私の心は墜落した。そんな感じだった。少し後悔した。……でも、お母さんの為だ。いや、これは私の為の願望だった。

私の所為だ……。私、大義名分があると勘違いしてたんだ……。お母さんは、望んでたのだろうか。逃げない覚悟。それはきつい道だと思うけれど、間違いではないと思う。私は、強制してしまったのだろうか……。それに家計だって、きつといままでよりは悪くなる。それは構わないけど……。ああ、もう、思考は脱線してばかりだ。

暫く公園で、ぼーっとしてしていると、向いのベンチにある男の子が座っているのが見えた。彼も私と同じように座っていた。何となくだが、相似していた。彼と私の様子が。いや、ちよつとまで、私は彼について情報を持っている。そうだ。私は直接的じゃないにしろ、彼を知っている。彼のお父さんは不倫をしているんだ。誰か

は解らないが、確かそうだ。私はじつと彼を見つめた。そのうち、その視線に気がついたのか、彼はこっちの方を向いた。そして、私に近づく。……何故だろう、彼には親近感を覚えた。いや、ちよつと待て、噂屋によって彼には私がリストカットしたって情報が流れている筈だ。そう思うと、気不味い。というか、気分が悪い。そして彼は私の目の前に立った。

「どうせお前も俺の父親が不倫したって言いたいんだろ？」

その青年はやや自暴自棄を感じさせる口調でそう答えた。当たり前だ。それにむつとした私は更にこう言い返してやった。

「そういうアンタは私がリストカットした子だって言いたいんだろ？」

「えっ？」

それは、お互いにとって吃驚だった。何故だ？思えば彼と私との

接点なんてないに等しい。それなのにお互いの情報を持っている。例えそれが噂であろうと……。

「お前まさか」

そこまで青年が言って、合点がいった。

「貴方、まさか……、噂屋に秘密を売った？」

それは暗号のようであって直球の物言いであった。それに青年は体をぴくりと動かす。

「それじゃあ、やっぱりお前も……？」

公園のベンチ。座っている私と目の前で立っている彼。お互いに固まる思考。思えば、ある意味、これは運命の出会いであった。

「まさか同じ境遇の人に出会うとは思ってなかった」

「俺もだ……。しかもこんな身近にいるんだもん」

公園のベンチに座って“噂の二人”が話す。行き交う人々は一々こつちを見ては通り過ぎていくという有様だったが、それにももう慣れてきてしまった。彼の名前は保志^{ほし}輝^{ひかる}。最初聞いた時は笑ってしまった。“星光る”なんて、変わった名前だなあ、と思ったからだ。それを本人に言ったら照れながら、よく言われると言った。彼は若干長めの髪型である。顔もそこそこ悪くなく、しかしその代わりと言ってはなんだが、身長は私より小さいところを見ると、165センチはないらしい。勉強面は解らないが、頭の悪いやつではなさそうだ。現に私より早く噂屋に関与しているってことに気が付いていたし。

「あなたは一体親の不倫をばらした代償に何を得たの？」

そういうと、彼はバツが悪そうな顔をして、財布を取り出した。

そこには、札、札、札の山。おおそ学生が持って良い額ではない。「……百万円だよ。財布の中には十万しか入れてないけど、銀行には残り九十万が入ってるぜ」

前言撤回、あまり頭のよさそうなやつではないかもしれない。…どうせいきおいで頼んでしまった願いのだろう。もつとも三万円を最初に求めた私もあまり頭がよくないかもしれないが。あれはテスト、ということだ。

「親の不倫に百万ねえ……。下手したら離婚問題じゃないの。百万じゃちよつと安くない？」

「やっぱりそう思うか……。俺も言つて後悔したよ……。俺ん家、今大惨事なんだ……」

「お互いになんだよねえ。自業自得だから他人に愚痴も言えないしさ」

「そうだな……」

「噂屋か……。一体何なんだろうね……」

「お前は、なんだと思うんだ？」

私？唐突な質問に少し考える。

「……私は……。あれは宿願機だと思うんだ。無意識下の具現化。こうなれば良いのにつて願望がつもりにつもつてああいうのになつたんじゃないかな……。つて。だからあそこにはなんでも出来る力があるんだと思う。代弁人も、あれは夢と現実の不連続面つて言つていた。つまり、それは同時に自分の願望と現実でのリスクの不連続面でもあるんじゃないかなつて、私、思うんだ」

そう言つと、保志は黙りこくり、眼をパチクリさせた。

「お前、小難しいこと言うんだな……」

そう……。そうかもしれない。夢見がちな少女は、ときに博学であつても良いと思つた。何故ならそれが夢を實現する為の代償行為だと思ふからだ。

「噂屋でのルールつて知つてる？」

私は保志に尋ねた。

「いや、俺はまだ一回しか行つたことないから……」

「そう、じゃあ私が教えてあげる。一つは、噂屋での取引は確實に行われる。二つ、自分の秘密を払ふことによつて願望が實現化する。

その変わり自分の秘密が噂として流布されてしまう。三つ、願望と比例した分の秘密が、必要。私を知る限りでは、こうなってる」

腕を組む保志。何かを考え込んでいるみたいだ。とすると彼は唐突に言いだした。

「四つ目だ。噂は誰彼構わず流布されてしまう。知らない奴にも、一発で見抜かれる。知人だけじゃすまない」

「ああ、そう言えば、見逃していたわ。そうやって私達今話してるんだもんね」

……考えてみれば、ハイリスク・ハイリターンだ。人に噂されると言うことは、あまり気持ちの良いものではない。自分が明らかになるということは、結構怖いことだ。特にそれが秘密ならば、当然の如く、である。

「まあ、良いわ。私達があつたのも何かの縁ね。連絡先、一応交換しない？ この後も何かと連絡取りたいし」

「え　？　でも……、あ、いや、構わないけど。携帯のメアドで良いよな」

「何いつてるの？ それ以外ないじゃない」

そんなやりとりをして、私達は携帯のメアドを赤外線で交換した。「ありがとう。何かあつたら連絡するから……。今日はさようなら」

そう言つて、私は歩く。特にもう彼とすることも見つからなかったからだ。自分で言うのも何だが、スマートだ。

「あ、ちょっと待って」

彼に引き留められる。思わず立ち止まる私。

「何？」

そう言つと、彼は数秒間をおいて、やがて決心したかの様に聞いた。

「お前は何を望んだんだ？ リストカットって秘密ばらまいてまで」

「秘密！」

言える訳もなかった。

家に帰る。

私は母親にあつた嫌悪感が薄れているのを感じていた。楽しい会話、楽しい食時。それは夢の中よりも至福のものであつた。食事時は特に会話が盛り上がった。

「これ、美味しいね！　いつも有難う、お母さん」
「ええ、おそまつさま」

母はもう、家を極端に留守にすることはなくなった。止めてくれたんだ……本当に。外は酷かったけど、家はとても温かかった。

そんな幸せな夜、寝る直前、それをぶち壊しにするくらい残念なメールがきた。保志からの初めてのメールは、驚愕のものであつた。

『親が離婚した……』

そんな一通。正直言われても困るのである。

ああ、保志は幸せな私に慰めを求めているんだな、とすぐに解つた。……でも、今の私が言える言葉つて、限られている……、というか慰められない。現に、へえ、そうなんだ。という感想位しか、浮かんでこない。だって、所詮は今日あつたばかりの他人事に過ぎないのだから。私は、薄情だろうか。取りあえず、返事を返す。

『そつか……、元気出して？』

駄目だ、すぐに削除した。こんなんじゃ慰めにもならない。……

ごめん保志、かける言葉が見つからない状況つて、初めてだよ。てかあんた、唐突過ぎるつてば。

『噂屋に頼んでみるつてのは？』

んん、これはいい返事かもしれない。他人事だから出来る返事だけど。保志の噂がばら撒かれるのは確実だけれど、もっとも迅速かつ安全にことを運べる良い返事だ。すぐにこれを返信した。その数分後に新しい返事が来る。

『……俺一人じゃ不安だから、夢の中で会えないかな』
「なんですとつ?!」

思わず声を荒げた。夢、の、中、で、会わない？つて、不可能だ

る？いやもしも世界のどこかで夢って世界があつて、寝てる間脳から出る電気信号が夢に送信されてるとかそんなだったら出来るかもだけれど、現実問題無理だろ。

『出来るかどうかわからないけど……まあ、やるだけやってみるよ』
そう返事を出す。

てかよくよく考えたら噂屋だつて、たどり着けるか解らないのだ。それなのに夢で落ち合うとかいう無理難題とかけあわせると……。

まあ、酷く不可能に近いんじゃないかな、と思い始めてきた。

それからもくる保志からの返事を適当にいなしながら、その夜は眠りについた。そう、眠ってしまったのである。

真っ暗な空間に出た。私の体は無重力に作用して浮いていた。そう、この空間には重力という概念は存在しないのである。……厳密に言えば、重力という概念が存在しないのだから、無重力という概念も存在しないのであるが。そこは突き詰めると難しくなるから却下。

「園田?!」

声がかけられた。……いやまさか、そんな都合よくはいくまい。そうタ力をくくって、声の方向へと顔を向けると、そこには不安そうに微笑する保志の姿があった。 「冗談だろ？」

「保志じゃないか……。奇遇だね。ははっ」

力なく笑う私。

「なあ、ここどこなんだろうな。何か俺たち浮いてるけど……」

真っ暗なのにお互いを認識できる不思議な空間。そんな空間に、私は覚えがあった。……そう、ここは最初のブラックホールみたいな、あの空間。噂屋の胃袋の中である。

「ようこそ……」

陰険でおどろおどろしい声がかけられた。ビンゴ。どうやら当た

りらしい。……まさか、夢を見た瞬間から噂屋に直通なんて、信じたくもない現実だった。いや、夢か。

「代弁人、早速だけど俺の願いを聞いてくれ」

「承知しました……」

勝手に話を進める保志。私は願い事は特になかったので、黙って見守っている。約束は守っているし、問題無い。

「家の両親を、幸せにしてくれ……！ 頼む……」

「承りました……。では御代を頂戴致しまする」

保志は、そこで私の方を見た。そこでジェスチャーをする。耳をふさいでいてくれ、と。……言われたとおりに耳を塞ぐ。でもまあ、どうせ夢から覚めたらその秘密もわかってしまうのだけだ。

「

彼が口をパクパク喋らせている。それが終わるころ、私は耳を塞ぐのを止めた。

「……お題が足りませんなあ……。そちらのお嬢さんからも貰いましょうか……」

突然、代弁人はそんなことを言いだした。えっ？！ちょっと待ってよ、何で無関係の私までそんなことしなくちゃいけないの！

「……悪いけど、……頼む、園田！」

頭を下げる保志。冗談じゃない。

「ねえ代弁人さん、保志からまた秘密を聞くんというんじゃダメなの？」

それに首をふる代弁人。

「“噂屋”が欲しいのは、むしろお嬢さんの秘密なんでね……それは出来ません」

じよ、「冗談じゃない。何がサービス業だバーカ！

「頼む、園田」

「お嬢さん……ほら……」

「く、くそ……。う。解った、解ったわよ、言えばいいんでしょ？！言えば」

「ありがとう！ 園田！」

結局、プレッシャーに負けてしまった。保志にジェスチャーする。聞くな、と。耳を塞いだのを確認すると、私は覚悟を決めた。

「いい？ 言うわよ……。私小学生の頃花瓶を割ったのずっと黙ってました。その花瓶の価値が十万円位したの。骨董好きな先生の花瓶だったんだけど、それずっと黙って生きてきました。これ
で良い？」

「……承りました。お買い上げ、ありがとうございます」

正に価値、十万円の秘密である……。そして、目覚めは唐突に、訪れた。

飛行少女2

目覚めは唐突。 最近は夢見が悪いと言えよう。一応私は望みどおり飛ぶ夢を見ているのだが、どうも不完全燃焼だ。まあ最近では忙しなかったから仕方ないだろう。

「しかし……」

もう大分前のことだから、時効になってくれると良いんだけど。十萬円の壺を割った少女。今日から付く私のレッテルだ。……本当にもう、最悪である。ああでも、先生は私の住所なんて解らないよね。それに幾らなんでも怒りにくるなんて……、小学生の教師じゃあるまいし……。いや、骨董好きの先生は小学校教師だったか。

「麻美！ 朝ごはんよー」

いつもどおりの声、それに私は、はい、と答える。

「いただきます！」

「いただきます」

最初に私が一声。その後続くようにお母さんが声を続ける。

「そういえば麻美、大分前だけど、先生の壺を割ったでしょう？」

……なんてことだ。朝の始まりがこんなことになるなんて。ああ、

最悪！

「そう、……そうよ！ 割りました。ごめんなさい」

「お母さんに謝らないの。まあ、大分前のことだし、今更よねえ……」

いや、もう、本当申し訳ないっす。でもどうやら、噂は時効だったらしい。

食事を終わると、私は保志にメールした。彼の近況が気になったからだ。今日公園で会えない？と、そう、メールした。

静寂につつまれた公園は、秋休みという特殊な休みの為だった。子供たちはきつと幼稚園にでも行っているのだろう。そんな静寂を切るように、保志が現れた。

「……あんた、小4まで寝しょんべん癖治らなかったみたいね」
出会い頭にそう言ったのは私。それが保志の秘密だったようだ。

面白い現象だった。彼に会った瞬間、彼の秘密が解ったんだ。なるほどこれが噂屋の力。改めて実感した。

「う、うるさいなあ！ お前だって結構な価値の壺割ったみたいじゃないか」

そう、恥ずかしそうにする保志の言ってることは、情けないの一言に尽きた。

「ところで、両親はどうなったの……？」

「あ、ああ、それが……再婚が決まった……」

瞬間、私はきつと間抜けな顔をしていただろう。何故、を問う必要はないだろう。

「は？ てか、は？ 再婚？」

「そうなんだよ……実は母親も不倫をしていたらしくって、不倫相手と……再婚。お父さんも、その、不倫相手と、再婚が決まったみたい……で……」

「はあああああああ？！」

とんでもない仰天は、時期に叫びに変わり、今度は私が周りを仰天させるのであった。

「家の両親を、幸せにしてくれて願ったのよね、確か。つまりそれって、凄く幸せな終わり方なんじゃないの？ 両親にとってそれがつまり、うん、そうなんだよ。まああんたの幸せは解らないけど。ちなみにどっちの方につくの？ 父親？ 母親？」

「……はあ……。そんなこと考えてる余裕無いよ……。でもまあ、やっぱり父親かな……。どうやら父親はこの近くに愛人持ってたなら

しいから、引つ越しもあんまり大げさじゃなくすみそうだし……」

「安易な理由ねえ……」

「いや、学校転校すんのは精神的にまじでくる……」

「でも学校行つたつてしょんべん小僧のあだ名がつくだけじゃない？」

ぐわっ！と大袈裟な仕草をする保志。……案外本気の仕草なのかもしれない。

「ちなみに、両親超良い笑顔で離婚するつて言つたんだぜ……、信じられるか？」

「そりゃあ、可哀そうだね……」

よつぽど幸せな選択だったんだろうなあ……、とそう思った。その後はとことん保志の愚痴に付き合させるはめになって、いい加減日が暮れる頃に帰ることになった。

その日の午後。珍しく真剣な表情のお母さんがいた。それは夕食前の会話。

「麻美、実はお母さん、前々から付き合っていた男の人がいたの……。その……言い方は悪いのだけれど、本命の男の人」

初耳だった。て、言うか本当に言い方が悪くてびびった。それで……、何が言いたいのだろう。私は怪訝な顔をしながら聞いた。「お母さんね？ 晴れて再婚が決まりました！」

華やか、という言葉が似合う表情で、お母さんは言った。って、うん？

「え？」

って、え？今この女はなんと……？

「嬉しくないの？ ……麻美は……。本当に言い方悪いけれど、収入も安定するのよ？ それが目的じゃないけれど……。お母さんはねえ、再婚、したいの。幸せになりたいの」

「や、それは構わないけど、本当急だね……。どうして？」

そう言つと、お母さんはバツが悪そうにしてこつ言つた。

「実は……不倫だったの。だけどその付き合ってる人がねえ、とうとう離婚したの。私を選んでくれたの！ 本当、不謹慎な話でごめんなさい。でもお母さんその人のこと本気で好きなの……」
ちよっと、待て……。そりゃ、タイミングが良すぎる……。

どうやら父親はこの近くに愛人持ってたらしいから
不倫相手と、再婚が決まったみたい

まさか……とは思うけど……、まさか、まさかまさかまさかのかさま……、再婚相手って、

「保志って言う名字の人じゃないよね、再婚って」

「ええ、違っわよ！ だあれ？ 保志って。私が結婚するのは、藤崎さん！」

「な」

なんだあ。それなら別に……、いや、まあ、良いか悪いかはわからないけれど、なんという偶然！という事態は避けられた。保志の事は嫌いじゃないけれど、……そういう一緒に住むとかは無理だから。

「はあ、……明日紹介してね？ じゃあもう私、寝るね」

藤崎さん、かあ。どんな人だろう。良い人だと良いけど……。不倫の末、だもんなあ。

「うん、おやすみ」

母親の、のったりした声。それを背後に聞きながらベッドに移る。
その日の夜は、夢を見なかった。

翌日、玄関先にて、かなり早朝から、母親は例の藤崎さんとやらを紹介してくれた。その子供付きで。まあ、それ自体は良かった。まだ良かった。問題は、

「なんでお前がここにいる！」

「それはこっちのセリフだ！」

その連れ子は、まごうことなき、保志 輝であった。

「だーかーらー、藤崎は旧姓なんだよ！ 何度言ったら理解してくれるんだ！」

「だってなんで母親の名字の保志が優先されてんのよあんたの家は！ 普通父方の名字が優先されるでしょうに！」

「うちじゃそういう決まりだったんだよ！」

「あーもう、うっさいなあ。解った、解ったわよ。はあー、なんであんと同棲しなきゃならないんだか……」

「ど、同棲って ばっか違うだろ?! ただ……住む家が一緒ってだけで……」

保志は大分同棲という単語に抵抗があるようだ。

事情と言えば、だ。私達は、両親の気まぐれ、というかラブラブ現象の為、家を同じにすることになった。まだ正式に結婚はしていないが、近日式は挙げずに役所に届けを出すらしい。

「それを同棲と言わずして何と言う！ もう、私は園田のままでいるからな！ 藤崎を名乗るつもりはないからな」

とりあえず私は激しく言い返す。現状が信じられないから、余計声が出る。

「あーあー、別に良いよそれで。……てかさ、何に怒ってるんだよ、園田は」

「何につて……」

え……と、何に、だろう。

「……とりあえず反発してみただけよ。はいはい、仲良くしましょーねえ、おもらしさん」

原因不明の癩癧をいちいち説明出来る程私は大人じゃない。

「する気ないだろお前……。まあ、秘密の共有者通し仲良くしようぜ」

そついう彼の顔は、なんとも渋いものであった。もっとも、私達の秘密は、全国公認なのだが。

私は歯を磨いた。歯を磨くとき、私はよく口を濯ぐ。それは口の中がもごもごする原因は歯磨き粉にあると思っっているからだ。いや、信じている。きっと口内で歯磨き粉の残りカスがぶくぶくと泡立つのだ。何故口がもごもごすると困るか？それは円滑な人間関係とは、滑らかな話術にあると私は思うからで……。こうしているのも、滑らかな人間関係を保つためなのである。

「はい、あーん」

「あーん、もぐもぐ、うーん美味しい！」

目の前でラブラぶつてる両親（片方は義父予定）の為でもある。保志と仲良くする為でもある。そして何より私の為、私は歯を磨くのである。嘘だ。本当は眼の前で練り広げられるラブラタイムがむかついて、すつきりするために歯を磨いたのである。

「ごちそうさま」

私は席を立つた。それと同時におずおずと隣に座っている保志も席を立つ。そしてまたおずおずと、ごちそうさま、というのだ。

「それにしても、二人が知り合いだなんて、お母さん知らなかったわー。学校も別々なのに、どうやって知り合ったの？メル友？」

間抜けな母の質問に、私はちよつとね、と答え、自分の部屋へと移動した。その後特に気にする様子もなく、両親はまたラブラブし始めた。……近いうちに、胃に穴が開くな。

一階はお母さんの部屋とリビングが主だった部屋だった。お母さんの部屋にお父さんが一緒に寝るといふ形に落ち着いた。そして保志の部屋だが、二階にお父さんの部屋が空き部屋として残っていたので、そこを保志が使うことになった。私は、保志と一緒に暮らすことに未だ抵抗を感じていた。だって、共通の秘密を持つとはいえ、

保志は所詮赤の他人なのだ。中途半端に知り合ってしまったから余計に性質が悪い。それならいっそ、知らずに同棲した方が良かったのだ。そう、私は思っていた。

階段を上る。

「保志」

私は後をのこのこ付いてきてる保志に話しかけた。

「今は保志じゃなくて、藤崎」

やんわりと保志が訂正するが、私の中では保志で定着してしまったので、お構いなく保志と呼ばせてもらう。

「そんなことはどうでもいいけど、あんたこれからどうするの」

「どうする……って、どうもしないよ。普通に生活するだけ」

確かにそうだ。私達がどんなに対立しても、世界がどうこうなる訳でもないし。

「でも、これから普通に生活なんて、出来る？」

保志は暫し考えた後、顔を上げた。

「わからない。でも努力しなきゃ、意味無いじゃん？」

どうやら、保志の方が私より大人なようだ。

休日も半ば、私は、もとい私達は暇を持て余していた。そんな休日のリビングにて。

「なあ、バンド組まない？」

保志が唐突にそんなこと言うもんだから、笑った。

「無理無理。私楽器扱えないし。それに第一保志、あんたの性分じゃあ、ない」

「断言することないだろう？俺だってギター弾きたいんだよ、カッコ良く」

あまりにしつこいから、鼻で笑った。

「あんたみたいなタイプはね、周りがやらないとやりはじめないタ

イブなの。自発的にやらなきゃ意味ないでしょうが」

それにむっとした顔をする保志。

「だからこうして自発的に誘ってるんじゃないか」

「それが根本的な誤解なんだっての。あんたはバンドを自発的に始めるように見えても、実質私が参加しないと絶対にやらないね。断言する。絶対私が参加しないとやらないね」

「バンドは人数がいるんだよ……」

だから、それが言い訳だというのに保志は……。

「私、出掛けるから」

「あ、待てよ、俺もついてくって」

……なんだろう、妙にうざったい。

「勝手にすれば」

特に断る理由もないのでそういった。

「おう、そうする！」

冷たくあしらったつもりだったが、それでも保志は嬉しそうに表情を変えるのであった。

商店街は相変わらず賑わっていて、そんな賑わう商店街に、“噂の二人”がやってきた。気がついたら、周りの人々の視線を感じる。……様々な噂を垂れ流しすぎた。保志は二つの秘密を、私は三つの秘密を。そんな噂達が別の意味で商店街を賑わせていた。く、悔しい。

「あんたもいるから、余計視線が集中するじゃない」

「おまえだって、俺より酷い噂流れてるじゃねえか……」

「あーもう、どうでも良いわ。とりあえず店に入ろう？ ゆっくり

お茶でも飲んで、嫌なことは忘れよう。あ、もちろん保志の奢りね」それに保志は少し嫌な顔をしたが、提案を素直に飲み込んだ。なんとなく保志は百万円も持っているのだ。奢らせなければ損だろう。適当なお店に入る。からんからん、と入店を知らせる鐘の音が聞こえる。店内は適度な温度を保っていた。全体をシックにまとめた

この店は、お洒落だった。値段も相応だろう。テーブル席に着く。一瞬店員の視線を感じたが、接客業を意識しているのか、余計な詮索をするような視線はなかった。店にまで噂が繁栄しているのは知っていたが、居辛い。

「私、カフェモカ。一番大きいサイズ」

「ば、それ五百円もするじゃねえか」

「だから頼んでんのよ。贅沢したいじゃない」

「釈然としないな。とりあえず俺もそれにしよう」

保志はこの手の店の勝手がわからないのか、おどおどしている。まあ、だから私と同じ商品を頼んだのだろう。カウンターに注文をしに行く保志。それでなんかおどどと注文をしている。その様は滑稽で可愛かった。暫くして、商品を受け取り戻ってきた保志。

「持ってきたぜ」

「うむ。御苦労」

「はあ……、一万円で買い物したらお札が沢山かえってきた……」

この似非金持ちが。別に羨ましくなんてないからな。いや、もう、本当に。

ゆっくり口をつけてカフェモカを味わう。……とても柔らかい味がして、値段相応に美味しかった。一方保志は、このマイルドなコーヒーを、苦い……、と言って不味そうに飲んでいた。保志はどうやらおこちゃま舌らしい。実に勿体ない。

「俺達、暇を潰してんだよな……」

とうとう苦さに耐えられなくなった保志は、コーヒーを飲むのを止めた。そんな保志が唐突に話しかけてくる。

「ええ、そう。あまりに暇だったから、暇潰し」

「でもある意味これって、デートって言えないか？」

デート？はて、これって、デートと言えるのだろうか……。否、それはないだろう。私は鼻で笑った。

「ばーか、意識してるからそう思うんだってば」
「そっいうもんか？」

「そういうもんなの」

「ところで俺の残りのカフェモカ、いらない？」

「残すの？ 勿体ないなあ……。じゃあ仕方ないから飲む」

そう言っただけだと、保志はぼつとこっちの方を見ていた。

「どしたの？ 気味悪いなあ」

「ああ、いや、間接キスとか気にしないんだな……」

「あんたが言わなきゃ、気にしなかったかもね」

最悪である。

それから商店街を移動、移動、移動。適当に散歩を楽しむ。一時間たつ頃には、周りの視線も気にならなくなつたし、案外保志と一緒にいるのも楽しく感じ始めた。

「それでさ、お母さん石鹸の入ったコップでうがいをしちゃったんだ」

「お前ってひどい奴だな」

笑いながら雑談に花を咲かせる。話の内容はくだらない。小さい頃私が洗面所のコップの中に液体石鹸を入れまくって、それに気付かずお母さんがうがいをして泡を吹き出したって話だ。相も変わらず店を転々と動いている私達は今本屋にいた。適当な、買う気もない雑誌を適当に手に取り、それでいてそんなことそっこのけで馬鹿話をしている。

そんなひと時は、案外幸せだった。このときは、夢と比べても、現実の方が楽しかった。そして新しい本でも立ち読みしようかな、と思つたとき

「あれ？ 園田さん？」

声をかけられた。その人物を私は知っている。なんて言つたって、親友だからだ。そう、糸川である。

「お、糸川じゃん。糸川も読書？」

「読書って……、私は本を買いに来たんですよーだ。立ち読みじゃないもん」

「あはは、それは結構」

「ところで、だあれ？ その人」

笑顔のまま、糸川は保志の方を見てそう言った。あ、そういえば保志とは面識ないんだっけ。って、そりゃそうだ。私達の出会いだつて、突拍子の無いものだったもの。

「ああ、彼は保志 輝っていうんだ。一応友達」

一応、の部分に反応して、保志は言い返す。

「一応ってなんだよ。仮にも住まいが一緒だつてのに」

その発言を聞いた時、私はこいつの頭の悪さを呪った。そして心の中で再三馬頭する。

「えっ？！ 住まいが一緒って、どういうこと？」

「あ、あー、えーっと、事情があつて、色々ねえ……」

てんばつて何も言えない。そこにフォローするように保志が発言をした。

「ああ、こいつの母親と俺の父さんが結婚することになって、今同棲中なんだ。まだ正式には戸籍一緒じゃないんだけど、慣れ合つて意味でも良いだろうってさ」

それに対し糸川は眼を丸くしながら、やがて表情を和らげこう言つた。

「へえー、でも不倫だつたんだよね……。良かったね、何とか一緒になれて」

……あ、そうか。糸川にも噂として伝わっているんだつた。ちょっと油断したから驚いた。

「うん、まあ、不倫でも家の親共は仲良さそうだから、たぶんなんとかなるよ」

それは言い訳がましいかもしれないが、私の本心でもあつた。

「うんうん、その子供たちも仲良しなら、問題なさそうね！」

ニヤニヤしながらそう言う糸川。数秒遅れてその意味を理解した私。

「ばっか、違つてば。保志とは本当に友達だかね」

「あれー？ 私、別に勘ぐってなんていなかったんだけどなー？」
「はい、はい」

そんな会話をしていた頃、保志は何をしていたかと言えば、適当な本を立ち読んでいた。それを見計らった訳ではないだろうが、糸川が、こつちこつち、と手招きをする。……別にそんな距離感をとれる程の間もないが、私はそれに誘われるがままに行く。

「ねえ、保志君って、カッコいいじゃん」

ひそひそ声で、糸川は言った。

「ええ？ そうかな……。髪の毛ウザたいし、頭も悪いし、おねしょ野郎じゃん」

「髪型とかはあれで良いと思うけどなあ……。てか、園田さんって言い方ひどいね」

「保志相手だったらこの位で良いんだって」

「やつぱり仲良いじゃん」

「ははは冗談を」

そんなひそひそ話を遮るかの如く、噂の保志がこつちに駆けてきた。

「二人で何してんの？ あ、もしかしてこれから遊ぶとか。なら俺帰るけど……」

それにぴくりと反応する糸川。

「あー、別にそんなんじゃないから、ごゆるりとどうぞ！ じゃあ、私帰るから！ またね」

手を振りながら元気に帰ってゆく糸川。……気を使っているみたいだ。

「何か、気を使わせちゃったかな……。俺強引だった？」

「別の意味で気を使わせたみたいね。別にあんたは悪くないよ」

「そうか？」

「そうよ」

次の日の朝。兎角することのない秋休みの中盤、どうやら正式に両親が籍を入れたらしい。これで“正式な両親”となり、私達は藤崎兄妹となった。誕生日で決めたため、私が妹ということになった。でもまあ、そんなこと子供の私達には関係なく……。

「おい！ 保志！」

未だ保志で通っているし、兄妹意識なぞ皆無だった。

「なんだよー。まだ眠いつての……」

自室で眠っていた保志を起こす。

「出かけるわよ」

「出かけるって何所に？ てゆうかお前からデートの誘いとは珍しいなあ」

「ばーか兄妹でデートとかないつての。特に目的地はないけど、暇なんだつてば」

「宿題でもやれよ……」

「ない！」

その一言で決定打。私の声は鶴の一声。私が烏を白いと言えば、保志は白いと言わざる負えない。そんな関係が、現在の私達である。つまり、完璧に尻に敷いていた。

「あーもー、遊べば良いんだろ、遊べば……。解ったよ、着替えるから出てっくれ……」

「風呂場で寝癖も直しなさいよー。後朝飯食って歯磨きも忘れない！」

「いちいちうるさいぞ。お前は小姑か！」

無論、そんなつもりはない。私は保志に指示を出し、それが全て済むまで自分の部屋で待つことにした。

……別にテレビのあるリビングでも良かったが、最近は義父と母の仲睦まじさに拍車をかけるような勢いなので、あまり行きたくもなかった。二人の邪魔をするのもなんだし。

そんなことを回想していると、準備が出来たであろう保志が私の

部屋をノックする。

「おい、準備出来たぞ」

「わかった。すぐ行くー」

場所を変えて、またまた商店街。と、いつかこの近くの娯楽施設は、商店街以外ないといっても過言ではない。なので私達は必然的にここにいることになる。

「お前も飽きないね。商店街。俺はもうどうでもいい感じだよ」

「そんなテンション下がることいきなり言わない、と。お金だけは無駄にあるんだから、楽しもうよ」

そんな些細なやりとりをしながら歩く。商店街は相変わらずワイワイガヤガヤって感じの擬音がして、騒がしい。例えるならつまらない授業中のお喋りが絶えず聞こえてくる感じだ。ゆっくり歩きながら周りを見ると、建物は多種多様な形を自慢げにアピール（装飾）して、如何に私達を誘惑するかを考えているように見えた。歩くスピードに合わせ、周りも少しずつながらも、景色として流れてゆく。このゆったりした時間が、私は好きだった。

「あ、文具店入ってもいいか？」

唐突に保志がそう言いだした。もちろん、断る理由なんてどこにも見つからない。

「ん、良いよー」

そう、軽い口調で答えながら、私達は文具店へと入っていった。文具店の中は独特の匂いがした。決してそれは悪いものではなく、なんとなくだが、好感を持てる匂いだったと、来るたびに思い出す。そんな匂いの印象が強いのが、私にとっての文具店であった。そんな中で彼は何を買うのか。彼の方を見ると、うろちよると忙しなく動いている。どうやら目的のものが置いてある場所を、天井からぶら下げられている看板を見ながら探しているようだ。そのコーナーごとに分かれた看板は、いっぱいあった。必然的にここが広い文具店だということに気づかされる。

「あ、あつたあつた」

そう言った保志の声を聞いて、私は声の方向へと向かって歩く。そのこのコーナーはスケッチブック。サイズはF6と書かれているものを持っている。表紙が緑色をした、内容は一般的な用紙だと、私は思う。

「スケッチブックつて、あんた絵でも描くの？」

そう聞くと、保志は何処となく具合が悪そうに

「ああ、昔ちよつとな……」

と答えた。それがあまりに聞いてほしくなさそうだったので、私はそれ以上の詮索はしないでおいだ。

その他文具店ではカッターと鉛筆（結構いっぱい）と消しゴムと練り消しとかいうやつと、擦筆とかいうのを保志は買っていた。そして保志は“お札”で会計を済ませると、店を出て行った。それを追って店に用のない私は保志に着いていった。

「ちよつと保志……速いつて」

「ん、あ、ああ、悪い」

心ここにあらずと言った感じた。適当に商店街の中心を歩いていくうち、立ち止まり、暫く考えるように保志は腕を組んだ。

「どうしたの？」

「ああ、いや、どうせ行くところないなら公園にでも行こうぜ」

「……？ 良いけど」

いまいちその提案を受け入れきれなかった私の返事は、どこことなく歯切れが悪かった。恐らくは、保志の思案が意にそぐわぬものだったら、一緒に居るのも辛いと感じるかもしれないと思ったからだ。でもまあ、公園に行くぐらいなら、私だって構わない。そうして私は、公園へと足を進めていった。

公園は秋休みということもあって、前と来たときと同じように幼稚園あたりの子はまだあまりいなかった。小学生くらいの子や、幼稚園より少し下位の子はいた。小学生共は、カードゲームをしてい

て、あまり公園で遊ぶのにふさわしい遊びとはいえないな、と内心思った。それに比べ親と一緒ににはしゃぐ小さな子供は、それはそれは子供らしかったよ。私達は適当なベンチに座り、保志はどうかしらないが、私はそれを眺めながら頬杖をついた。暫くの間沈黙が続く。びり、と何かを破く音がした。それは隣からだった。見ると保志は紙の包装を破いて中からスケッチブックと鉛筆を取り出していた。

適当にスケッチブックから一枚紙を破ると、その紙で簡易的なごみ箱を折り、作っていた。そしてその中に、鉛筆の削りかすを入れていた。鉛筆はカッターによって丁寧に、細く、長く削られ、それだけで芸術と呼べるようなヘンテコな形になっていた。一通りの鉛筆を削り終え、満足すると、今度はスケッチブックをめくり、紙に鉛筆を当て、走らせた。

子供達の声は耳元から遠ざかり、その代わりに静かな、それでいて騒がしい、しゃ、しゃ、という鉛筆の走る音だけが耳にこびり付く。

そう、保志は絵を描いていた。

最初は、へえ、と思つて眺めていたが、描きこまれるそれを見るたびに、私は心を奪われた。それは、間違いなく公園の一部だったからだ。しゃ、しゃ、しゃ、しゃ、と音は軽快に響く。練りゴムを練つて、それをとんとんとん、と画面に叩きつける。擦筆をもつて、すつ、すつ、すつ、と画面を擦る。あくまで公園の有機的な部分のみを描きだしたそれは、徐々に形を露わにしていき、一種の作品へと昇華していった。

「……へえ、凄いじゃん！」

「別にそんなことないよ」

私は素直に褒めたつもりだったが、保志は自分がそういうように、本当に凄いことなぞしていないという顔をする。そんな顔のまま、保志は描き続ける。それは、あまりに退屈な作業に見えた。

沈黙が続いた。

「俺、昔絵をやってたんだ」

唐突に保志が喋る。あまりに自然な口で言うもんだから、一瞬意味が解らなかった。

「今はやってないの？」

ああ、と保志は私の言葉に頷く。

「作品展に行つて解つちやっただ。俺の絵はただの落書きだつて、確固たる意志もなくて、主張もしていない、唯あるがままを子供が描いた落書き。魂つてやつが感じられなくてさ」

保志は淡々とそんなことを語る。だけどそれは、私に言わせれば、なんか受け取り用によつては自慢にも聞こえてくる内容だと思つた。「保志はすごいことをしてるっていうのに、自分が納得してないつただけで他人の意見を聞こうとしない。総じて保志って人間は自分勝手な奴だ」

私は無意識のうちに、口走つていた。素直に自分が凄いつて認めたのを驚いた。でも、後半の意見にはもつと驚いた。それは私の本音に違いなかったからだ。本音を本人の前で言える程、私は保志を気に入っていたという事実が、二重で私を驚かせた。

保志も私を見て驚いている。そのまま二人して固まつた。保志の手元には描きかけの公園の絵。

「う、うるさいな……」

保志がおずおずとそんなことを言つた。でもその後には「ありがとう」

と小さく呟いたのを私は聞き逃さなかった。保志は表情を少し変えて、絵に取り組んだ。その表情は、良い表情と言えるかは微妙だったけれど、悪い表情、つまらなそうな表情では決して無かった。そしてさつきと変わらずに作品には淡々と時間をかけて描く。ラフスケッチだったそれは、それから三十分しないうちに出来た。不思議とその作業を見ている間、私は苦痛と感じなかった。完成した公園は、不思議な感じがした。その……、どこか温かみがあつた。それは保志の個性つてやつが作品に影響を与えているからだと思

った。

「出来たの？」

「ああ」

「感想は？」

「久しぶりにしてはまあ良かったかな……？」

「それは良かった」

淡泊なやりとりだけど、それでも十分お互いに伝えることを伝えられた。別に表だつての意味ではなかった。お互い感情の部分で理解しているっていうか、言葉は飾りに過ぎないと言った感じだ。私達は意思疎通が、この公園の絵一枚によって可能となっていた。公園の絵が、代わりに私達を語ってくれているからだ。

「良い絵だね！」

「そうか……？」

「そうなの」

私は言いきつた。言いきつて良いものだと、私には言えると思つたからだ。

「……そうだな」

保志も苦笑しながらそれに同意してくれた。

「今度で良いからさ……」

「ん？」

「私の絵でも描いてよ」

気がついたら、そんなこと私は呟いていた。はつとする私。何言つてんだろう、と自分でも思つた。保志の方を見た。そしたら保志も意外そうな表情をしていた。そりゃ、そうだろ……。いきなり他人から自分の絵を描けって言われたら。でも保志は、

「不細工になつてもいいなら描いてやるよ」

そう言ってくれた。私は何処となく複雑な気持ちで、それに頷く。

「うん。よろしくね。でも美人に描いてくれたらもつと喜ぶよ」

「努力はするよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5501e/>

飛行少女

2010年10月28日06時49分発行